様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７００８１

研究課題名（和文）明清詩論の受容に関する考察を中心とした、近世・近代日本漢文学史の再検討

研究課題名（英文）An Analysis of the Sinitic Literature Written by Japanese from the 17th to 19th Centuries: Focusing on the Reception of Poetry Theories of Ming and Qing Dynasties

研究代表者
合山　林太郎（Goyama, Rintaro）

大阪大学・学内共同利用施設等・准教授

研究者番号：００５５１９４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世・近代の日本において、明清時代の中国の詩論がどのように受容されたかについて考察したものである。とくに江戸後期の漢詩壇に大きな影響を与えたとされる、明末の文人袁中郎（袁宏道、1568-1610）について集中的に検討し、近世日本における袁中郎に関する多様な理解のあり方を、様々な資料を用いて明らかにした。このほか、袁中郎を信奉し、古文字派打破を主張した山本北山（1752-1812）が、『梨雲館類定袁中郎全集』の不備など、袁中郎のテキストの複雑さに関心を持っていたこと、また、北山一派が編纂した『三家絶句』などの袁中郎の詩文集は、本文校訂などの点で興味深い問題を含むことを指摘した。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this study is to illustrate that how Japanese literary personalities of Edo and Meiji periods studied poetic theories of Ming and Qing dynasties. The analysis mainly focuses on their understanding of Yuan Hongdao (Yuan Zhonglang, 1568-1610), whose theory had a strong influence on the poetic world in the latter half of the 18th century Japan. Though he is known to be an advocate of the Xingling (J. Seirei) theory, that is, the theory which firmly considers depicting one's thoughts and sentiments directly in prose and poetry as most important, it can also be argued that his influence on the Sinitic poetry (Classical Chinese poetry) world in Japan is complex and diverse as seen from actual evaluations and responses to his poems. The various dimensions of Yuan Hongdao's works, including their textual variants, have been discussed by the scholars and poets of Edo period.

研究分野：日本漢文学（近世・近代）

キーワード：日本漢詩　詩論　袁中郎　袁宏道　漢籍　性霊　東アジア　和刻本

１．研究開始当初の背景

近世日本の漢詩文を歴史的に把握する際、とくに重視されるのが、18 世紀中後半に起こった、漢詩観の変化である。すなわち、18 世紀半ばまでは、特定の時代の作品を模倣して詩作すればよいという荻生徂徠一派（古文字派）の考え方（格調説）がひろい支持を集めていたのに対し、18 世紀後半から、自身の心情を率直に詠うこと、また、形式にとらわれないことなどを、作詩の要諦とする「性霊説」または「清新性霊説」と呼ばれる詩論が支支配的地位を得るようになった。

こうした「格調説」や「性霊説」は、元々明代、清代の中国において、唱えられた主張である。明代中葉に李攀龍や王世貞らをはじめとする格調説を信奉する詩人（古文辞派）が力を持ったのに対し、明末になると袁中郎らが、性霊説を唱え、彼らに強い反発を示し、新風を切り拓いている。清代においても類似する詩論上の対立があった。近世日本の詩人たちは、こうした明清の文人の主張に学んだのである。

とくに戦後の近世日本漢詩研究においては、性霊説の浸透＝擬古主義からの脱却という理解の構図が、文学史的な記述の際にしばしば用いられることとなった。富士川英郎や中村真一郎らの比較文学的見地からの研究、また、中村幸彦、日野龍夫、揖斐高ら、様々な考察がなされてきた日本文学領域における研究の中でも、こうした理解は一種の通説として共有されてきた感がある。とくに江戸漢詩の抒情性や写実性を高く評価されるなかで、、格調説の退潮と性霊説の浸透を一種の発展と捉える傾向が強かったと言えよう。

しかし、こうした理解のあり方に再検討を加えなければならない状況が出てきた。その契機となったのは、日本漢詩文研究の国際化である。

たとえば、今世紀に入って、中国においては、域外漢籍研究などの名称によって、日本、朝鮮などの東アジア諸地域を総合的に把握する研究が進んでいる。こうした学問的な潮流のもと、中国文学の諸事象有り様についてより精密に議論することが求められるようになった。具体的に言うならば、性霊説について考察する際でも、明末の袁宏道、清の袁枚など、同じ性霊派に分類される詩人についても、それぞれの特徴をより詳細に理解して考察することが必要となる。

また、中国では、詩文のテキストについてより厳密に検討することが一般的であり、日本影響を与えた中国文人について、詩文集の版種などを精密に分析することが要求される。

このほか、日本文学の領域においても、近世漢詩文について様々な検討がなされ、従来の性霊説の解釈などに、議論が提出されるようになった。

いわば、近世・近代の日本漢詩文については、輸入漢籍や和刻本など書誌の問題についても目を配りながら、実作と詩論の双方について詳細な分析を行う必要が生じてきている。本研究は、こうした問題意識に基づき、とくに近世漢詩史理解の要諦とされてきた性霊説の近世日本における伝播と浸透に焦点を絞りながら、近世期の明清詩論の受容の実態について分析しようとするものとして計画された。

２．研究の目的

本研究における主要な目的は以下の５点である。

（１）近世・近代日本の漢詩人が残した資料を網羅的に調査し、明清詩論を中心とする中国の文学理論が、どのように受容されたのかその概況を把握する。豊富なデータから、①受容レベル（いつ、作品や詩集に触れたのか）、②評価レベル（特定の詩派、詩人をどう評価しているか）の二点を明らかにし、近世・近代の日本漢詩文についての先行研究が描き出す構図に見落としや誤りなどがないかを確認する。

（２）性霊説などを主唱した山本北山をはじめ、近世日本漢詩史の画期を形成した人物が、中国のいかなる人物に影響を受けたかを分析する。その上で、影響関係を持つ中国・日本の人物の議論を比較し、両者の間にある違いなどを析出する。また、近世日本の文人たちのネットワークについて精査し、詩論に関してどのような文化圏を想定できるのかを検討する。

（３）日本へ渡来した、明清の詩文に関する書籍及びテキストの問題について明らかにする。具体的には、詩論史上の核となる人物のテキストについて、どのような詩文集によって日本に伝えられ、流布したのかについて分析し、テキスト間の異同を精査する。また、日本での詩文集の刊行状況を整理する。

（４）東アジア全体から、江戸漢詩史を捉え直すことも、本研究の主要な目的である。中国と日本の関係だけではなく、朝鮮への漢籍の流入状況、また、「性霊」「格調」「神韻」などの主要な詩論の用語の意味内容の違いなどを明らかにしてゆく。こうした比較を通じて、近世日本の明清詩論受容の特殊性を浮かび上がらせる。

（５）中国、勧告における文学や詩論についての最新の研究を参照し、その学術用語の用いられ方やそれらの定義を検討する。これにより、国外の学術世界と共有可能な認識の基盤を構築する。

３．研究の方法

本研究の方法は、以下の５点に要約できる。

（１）近世・近代日本の儒学者・漢詩人が残した資料（詩文集や随筆、詩話のほか、詩文集の和刻本の序跋、日記や雑記、蔵書書入れなど）から、明清時代の詩派や詩集、詩人に関する記述を抄出し、詩論の受容・評価に関わるデータを収集・整理した。

（２）性霊派の代表的な詩人である袁中郎の詩文集（漢籍、和刻本）について、国立国会図書館、国立公文書館、東京都立図書館、東京大学図書館、東洋文庫、静嘉堂文庫、愛知大学図書館、西尾市岩瀬文庫、京都大学人文科学研究所、広島大学図書館などが所蔵する諸本を調査し、袁中郎作品のテキストの異同について詳細に検討した。この作業により、諸テキストの流布の状況や詩文理解の過程について復原を行った。

（３）近世期の性霊説の浸透に大きな影響を及ぼした山本北山について、門弟などその周辺の人物の資料を博捜しながら、検討した。北山周辺には、大聖寺藩出身の樫田北岸と大田錦城の兄弟、越前・大野藩の雨森麟斎をはじめ、多くの詩人がいた。その中で、とくに錦城については大量の詩文稿が現存している。また、秋田藩の家老疋田柳塘にも詩稿が残っており、北山周辺の詩文の動向を知る上で好個の資料となる。これらを詳細に分析しながら、北山周辺での袁中郎受容の具体相、あるいは詩についての議論の有り様について知見を得た。

（４）中国・朝鮮などの文献からも近世・近代日本の詩論の受容に関する資料を集め、また、術論文の収集や、舶来書目や紀行・日記の調査によって、東アジアにおける漢籍流通についても調査し、近世日本漢詩文の理論的な発展を立体的に把握した。

（５）袁中郎その他の中国の詩人の作品を精読し、また、性霊説など明清時代の詩論について、中国における最新の研究について知見を深めた。その上で、近世日本における詩人の理解のあり方、あるいは詩論の受容の様相について、その特徴を析出した。

４．研究成果

上記のような検討を経た結果、次のような成果及び知見を得た。

（１）山本北山とその周辺の詩人を中心に、近世中後期の多様な袁中郎の受容のあり方を明らかにした。

通常、近世日本漢詩史においては、袁中郎の詩論を山本北山が摂取し、古文辞派批判を行い、それが詩についての認識に大きな転換をもたらしたとされる（擬古からの脱却）。しかし、仔細に見ると、袁中郎の受容のあり方は、一様ではない。

たとえば、北山周辺の詩人たちの間で作られた袁中郎詩への次韻詩を見ると、「賦得渓上落花」や「新買得画舫、将以為庵、因作舟居詩」、「美人睡起詞」などが選ばれている。多様な関心のもと、袁中郎の作品が読まれていたことが分かる。

また、松江藩の家臣桃西河は、袁中郎の詩を読んだ際の感想の中で、作品に見慣れない故事が詠まれていることを指摘している（『坐臥記』）。袁中郎の表現を複雑、難解なものとして捉えていたことが理解されるのである。

このほか、袁中郎の詩論は、17-18 世紀において、全面的に肯定されていたものではないことについても知見を得た。たとえば、明末清初の文人銭謙益は、袁中郎を高く評価しているが、同時に、中郎の詩文には奇矯あるいは卑俗な表現が多く、問題点が多いと指摘している（『列朝詩集小伝』）。同様の批判は、朱彝尊によっても行われている（『明詩綜』）。

こうした袁中郎に対する批判は、近世中期以降の日本に相当流布していた。北山自身が、『作詩志コウ』（天明 3 年刊）中で、銭謙益らの批判について言及しているが、北山よりも後の世代では、大田錦城がこうした清初の文人の説を支持する旨を表明している。北山の袁中郎の受容は、様々な曲折を孕んだものであったことが分かるのである。

（２）近世後期の性霊派の詩論を信奉した詩人の間に、詠物詩についての強い関心があることを指摘した。

たとえば、北山のもとで学び、袁中郎を熱心に学んだ樫田北岸は、祇園南海の「鶯梭」という詠物詩を得て感銘を受け、自らも「楓錦詩十首」を作っている。

19 世紀以降に活躍する江戸の詩人たちも、王漁洋「秋柳」詩や趙翼の「美人風筝」詩に対して次韻詩を熱心に制作している。『清人詠物詩鈔』などの詠物詩集も盛んに編まれている。

なお、検討を重ねる必要があるが、以上のような近世後期江戸詩壇における性霊説受容は、詠物詩的なものに偏っていると言える。つまり、中国における性霊説の議論と比較すると、描写のための技巧により特化したものと考え得るのである。

（３）袁中郎のテキストの問題についても、諸本の調査によって、その大要と問題点を明らかにした。

日本に渡来した袁中郎関係のテキストには、書種堂刊本、『袁中郎十集』、『梨雲館類定袁中郎全集』24 巻、『新刻鐘伯敬増定袁中郎全集』40 巻など多種にわたる。日本においては、梨雲館本が元禄 9 年に和刻され流布する。本研究では、梨雲館本の複数の版について整理を試みるとともに、和刻本に底本として用いられたものと同版とおぼしい、落丁を含む梨雲館本が現存する（国会図書館蔵本）ことを指摘した。

なお、北山一派の動向は、袁中郎のテキストの点から興味深い問題を有していると言える。

たとえば、山本北山は、この袁中郎のテキストの問題について関心を持っており、書種堂本が最もよいテキストと考えられること、梨雲館本に不備が多いことなどを指摘している。

また、北山の門弟は袁中郎の詩文集『袁中郎先生尺牘』及び『三家絶句』を刊行しているが、これらの詩文集のテキストは、通常とは異なる字句に作っている箇所が複数ある。その多くは単純な誤刻と考えられるが、一部、

現在残る主要な版のいずれとも異なる字句も確認できる。
（４）近世期における書籍の流入についても検討を行い、江戸の中後期においては、中国の詩文集や随筆が、長崎経由できわめてはやく日本へ渡っていることを確認した。
　日本への漢籍の流入の量とスピードが、東アジア・レベルで見ても特筆すべきものであったことは、たとえば、朝鮮の文人が日本へもたらされた漢籍の豊富さに驚いていることからも理解できる（申維翰『海游録』、李尚迪「蔫録を読む」(『恩誦堂集続集』) など)。
　なお、性霊説の江戸後期の詩壇への浸透などについても、こうした江浙からの迅速な詩文集の到来と関連づけて理解すべきである。江寧（南京）に居を構えた袁枚をはじめ、性霊派の詩人は、江南地方で活躍した人物が多く、彼らの詩文集が日本に多く舶載されることとなったからである。
（５）このほか、江戸・明治期の詩話や評論には、明の楊昇庵などが比較的多く参照されているという知見を得た。また、『三家妙絶』（文化 4 年刊）や『広三大家絶句』（文化 9 年刊）など、性霊派の詩人が編輯・刊行した中国の詞華集について、書入れや諸本の整理を行い、詩壇以外の人々にどのように新たな詩風が広まっていったかについて、見通しを得た。さらに、東京大学附属図書館森鷗外文庫蔵書への書き入れを調査し、森鷗外ら近代の文人にも、中国の詩論が引きつづき影響を与えていること確認した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）
合山林太郎「「鞭声粛粛」の明治―頼山陽「題不識庵撃機山図」詩と詩吟・剣舞」（『アナホリッシュ國文學』3 号、2013 年 4 月、pp14-21）

合山林太郎「How Traditional Literature Adapted Itself to Modern Media: Kanshibun in 19th Century Japan (邦訳：伝統文学は、いかに近代メディアに適応したか？―19 世紀日本における漢詩文)」(“TXT: Exploring the boundaries of the book” The TXT Team, 2014 年 9 月、pp175-181、
https://openaccess.leidenuniv.nl/bitstream/handle/1887/30052/TXT_Traditional_Literature_Modern_Media.pdf?sequence=1
〈2016 年 5 月 1 日最終確認〉)

合山林太郎「近世期日本における袁中郎の受容とテキストの問題―山本北山一派の動向を中心に―」(『雅俗』15 号、2015 年 7 月〈予定〉)

〔学会発表〕（計 2 件）
合山林太郎「近世日本における袁宏道の受容と和刻本及び絶句集」（写本版本研究集会、2014 年 12 月 27 日、慶應義塾大学）

合山林太郎「種痘をめぐる漢詩文」（第 116 回日本医史学会・大阪大会、日本綿業倶楽部〈大阪市〉、2015 年 4 月 25 日、日本医史学会）

〔図書〕（計 1 件）
合山林太郎「第 13 章　日本漢詩文」（湯浅邦弘編『テーマで読み解く中国の文化』（ミネルヴァ書房、2016 年 3 月、pp335-355〈全体 424p〉、ISBN:9784623075096、分担執筆）

６．研究組織
(1)研究代表者
　合山　林太郎　（GOYAMA Rintaro）
　大阪大学・大学院文学研究科・准教授
　研究者番号：00551946

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし